田原市図書館ふしぎ文学半島プロジェクト2024

“ふしぎ文学の達人”が選んだ　「ふしぎ」オススメ本

選者：金原瑞人氏（翻訳家・大学教授）

1.『泉鏡花きのこ文学集成』泉鏡花／著　飯沢耕太郎／編　作品社　２０２４

◆日本きのこ文学の第一人者、飯沢耕太郎が鏡花の作品のなかから、きのこがらみの小説やエッセイ８編を選んでまとめたもの。どれも、鏡花好き、きのこ好きの読者を楽しませてくれるはずだが、とくに「化鳥」が秀逸。鏡花作品の漢字は現代人には読みづらいものが多い。総ルビという配慮がありがたい。また、菌類分類学者、川村清一の『原色版日本菌類図説』の美しい図版が 190 点、併載されていて、これがまたうれしい。

3.『句集　人のかたち』月野ぽぽな／著　左右社　２０２４

◆街灯は待針街がずれぬよう／波打ち際は初夏の鍵盤指を置く／一心に空の崩れる夕立かな／ソーダ水痛い音して地下鉄来る／冬の月しんそこ零になりたい日／一よりも淋しきいのち髪洗う／ががんぼ飛ぶ空気にひっかかりながら／泳ぎきりしばらく水のままでいる／毛皮より短きいのち毛皮着る／どこまでがあなたどこからが桜／風車かなしいときは風を足す／かまきりは草のおもさの鎌をふる／海が溢れぬように鏡を伏せて春／まだ人のかたちで桜見ています

選者コメント

2.『死んだ山田と教室』金子玲介／著　講談社　2024

◆自動車にはねられて死んだ山田の声が教室のスピーカーからきこえてきた。スピーカーにとりついたらしい。級友たちはこれを極秘にして、毎日のように山田とのやりとりを楽しむようになる。そのなかで、かつての山田の活躍や、みんなとの関係が浮かび上がっていって、そのひとつひとつのエピソードがおかしかったり、面白かったりする……のだが、なにより、男子校的ばかばかしさが感動的だ。エンディングもすごい！

4.『昏色の都』諏訪哲史／著　国書刊行会　２０２４

◆出生時、全盲で、手術を経て次第に視力を獲得するが、「二十一歳をすぎた五年ほど前から、原因不明の不具合で、また視力が衰え始め」「日に日に世界のかたちを失いつつある」主人公の 26 年にわたる半生が語られる。その中心は、触覚、視覚、嗅覚、味覚を媒体とした、世界とわたしの関係だ。その関係が驚くほど斬新な形で捉えられていく。また、日本語とフラマン語との二重言語生活を送る主人公の文字への執着、筆記への耽溺ぶりも読みどころ。

選者：東雅夫氏
（アンソロジスト・文芸評論家）

1．『深淵のテレパス』　上條一輝／著
東京創元社　２０２４

◆「風変わりな怪談を、聞きにいきませんか？」……すべては、その一語に始まった。いま最も新しくて魅力的な「ホラー」の形を提起する、期待の新進作家のデビュー作。創元ホラー長編賞の栄冠に輝いた受賞作である。血みどろなイメージの既存のホラーを一新する、清新な作品だ！

2．『猫と罰』宇津木健太郎／著
新潮社　２０２４

◆①と創元ホラー長編賞を争い、惜しくも僅差で届かなかった有意の新鋭だが、
新潮社のファンタジーノベル大賞では、見事に雪辱を果たした。文豪・夏目漱石の家に止宿した、あの伝説の「猫」にまつわる、なんとも奇想天外な「もうひとつの」物語。猫好きならば、何を措いても必読だろう！

3．『初夏ものがたり』山尾悠子／著
筑摩書房　２０２４

◆著者がデビュー間もない時期（まだ京都の大学生の頃だ！）に発表したまま、復刊されることなく、何故かお蔵入りとなっていた「幻の名作」が、遂に再刊された。嬉しいかぎり！　しかも酒井駒子さんの見事な描きおろし挿絵付きで！　大切な死者との、一度きりの再会のひととき……
未読の向きは、この機会にぜひ、お読みいただきたい、瑞々しい傑作である。

4．『三行怪々』大濱普美子／著
河出書房新社　２０２４

◆昨年度の「泉鏡花文学賞」を受賞した、実力派作家の最新作は、何故か片々たるショートショート集だった!?　しかし、短いからといって侮るなかれ！　限られた枚数のうちに、「幻視」の煌めきを潜めた、宝石箱のような一冊なのである。大いに驚いていただきたい。

5．『夢の扉』マルセル・シュオッブ／著
上田敏 他／訳　国書刊行会　２０２３

◆ともすれば忘れられがちなマイナー作家シュオッブだが、名だたるフランスの文豪たちに、畏怖され敬愛される魅力は、まことに捨てがたいものがある。その名品群を、本朝が誇る翻訳陣が、心を込めて訳出した名訳選集が出た！　文学の醍醐味を、心ゆくまで愉しむことのできる一冊だろう。

リストのタイトル
９冊は、田原市図書館で所蔵しています。

2024.11 作成